

【論文】

コミュニケーション理論としてのルーマン理論再考

佐藤 麻衣 (淑徳大学大学院)

コミュニケーションをするのは人間ではない。
コミュニケーションだけがコミュニケーションできる。

1. はじめに

ルーマンの社会システム理論は、数ある社会学理論のなかでも、もっとも難解な理論のひとつだと言われている。冒頭に挙げたのは、そうしたルーマン理論の根幹をなす命題のひとつである。おそらく、多くの人はこの言葉に違和感をもつであろう。私がルーマンの社会システム理論を勉強し始めて一番はじめにつまずいたのも、これだった。「意味がわからない」と思った。しかしルーマンの著作を読むにつれて、だんだんと納得がいくようになってきた。むしろ、こうしたルーマンの考え方は、わたしたちが生きる「現実」に、非常に適合的だと思うようになった。

ルーマンの社会システム理論はおもしろい。しかしながら、ルーマンの難解なテキストをわかりやすく解説するような論文はほとんど見当たらず、そうしたおもしろさはルーマン研究者のあいだでしか共有されていないと言ってもよい。

そこで本稿では、冒頭に掲げたルーマン理論の中心命題をもとに、広範囲にわたるルーマン理論の一部をできる限りわかりやすく解説し、その上で、コミュニケーション理論としてのルーマン理論の意義について考えていこうと思う。

2. コミュニケーションとは何か

冒頭に掲げた命題について考える前に、ここではまずコミュニケーションそのものについて、ルーマンがどのように考えているのかをみていこう。

(1) コミュニケーションの3つの要素

ルーマンによれば、コミュニケーションは、情報、伝達、理解という3つの要素から成り立っている——「コミュニケーションは、3つの異なる選択、すなわち、情報の選択、情報の伝達¹の選択、および伝達やその伝達によって伝えられる情報の選択的な理解²あるいは誤解という3つの選択が総合されることをとおして生起する」(Luhmann 1995:113、傍点部分は原文ではイタリック)。

ここで言われる「情報の選択」とは、何を伝えるのかという情報内容の選択を指しており、「情報の伝達の選択」とは、選択した情報をどのように伝えるのかという伝達方法の選

択を指している。

そして「伝達やその伝達によって伝えられる情報の選択的な理解」（正確には「理解あるいは誤解」であるが、これについては次項）とは、伝達された事柄から、その情報それ自体の内容と価値を推し量り（＝選択し）、同時に、なぜそれが自分に伝えられたのかという伝達者の意図を推し量る（＝選択する）という、2つの側面を示している。

通常、「理解」と言うと、送り手が伝達したいと思った情報がそのまま受け手に伝わる、ということが想像される。しかしながら、ルーマンのシステム理論ではそうは考えない。

システム理論がいうところの理解とはむしろ、情報と伝達の差異、つまりはそれらの違いを把握することとして捉えられる——「理解のなかで、コミュニケーションは、コミュニケーション内容の情報価値とそうしたコミュニケーション内容が伝達される根拠との差異を把握する」（同上:115）。

例を挙げよう。たとえば、ある人から「今日は天気がいいですね」と声をかけられたらばあい、わたしたちは何と答えるだろうか。おそらく、多くの人は、「そうですね、今日は気温も高いですね」とか「そうですね、そろそろ桜が咲きますね」とか、何とか会話がつながるように気遣いながら、返事をするだろう。

このばあい、伝えられた情報は「今日は晴れている」ということであり、そうであることをわたしたちは了解している。しかしそれ以上に、わたしたちは、相手の言葉（「今日は天気がいいですね」）が、そうした情報を伝えるための言葉だったのではなく、挨拶代わりに、すなわちこれからコミュニケーションをはじめようという意図を伝えるための言葉であることもまた了解しているはずだ。だからこそわたしたちは、何とか会話がつながるように気遣いながら、返事をするのである。

そうしてみると、わたしたちは日常的な会話の中ですでに、意識的にしろ無意識的にしろ、このようにして、情報と伝達は別のものだということを、つまりは情報と伝達との差異を把握している。ルーマンの言うところの「理解」とは、まさにこうした事態のことをあらわしているのである。

（2）理解と誤解

繰り返しになるが、ルーマンは、コミュニケーションを情報、伝達および「理解あるいは誤解」の3つの要素からなるとしている。次は、この「理解と誤解」という部分に注目してみよう。

すでに述べたが、一般的には、「理解」と言うと、送り手が伝達したいと思った情報がそのまま受け手に伝わる、ということが想像されるようである。そして「誤解」とは、そうした事態の失敗を言い表している。言い換えれば、送り手が伝達したいと思ったこととは異なる事柄が受け手に伝わったばあいに、わたしたちはそれを「誤解」と呼ぶ。

だが、「誤解」とは、その名が示すように「誤った理解」のことである。さきほど、送り手が伝達したいと思ったこととは異なる事柄が受け手に伝わることを、わたしたちは「誤解」と呼ぶと述べたが、裏を返せばそれは、たとえ間違っていたとしても何かは伝わっているということである。言い換えれば、たとえ誤った理解であろうとも、何がしかの事柄は理解されているということになる。

そうだとするならば、誤解とは理解の一種である。つまり、送り手にとっては「誤解」

でしかありえない受け手の解釈もまた、ある種の「理解」なのである。ルーマンの「伝達やその伝達によって伝えられる情報の選択的な理解あるいは誤解」という言葉には、受け手の理解を送り手の伝達意図とは切り離し、受け手の「自由な」理解を尊重する姿勢が表れている。

(3) コミュニケーションが「理解」あるいは「誤解」される時

さて、では、わたしたちが通常、「誤解だ」と思うときはどのような瞬間だろうか。

理解や誤解という言葉は、受け手の「解釈」が送り手の意図どおりであったか否かを区別する言葉である。それゆえ、理解や誤解というのは、送り手の発した言葉が受け手によって解釈されたその瞬間に、そのどちらであるのかが決まるような印象がある。

しかしながら、実際はそうではない。わたしの発した言葉が他者によって解釈されたときにはまだ、わたしは、他者がわたしの意図とは異なる解釈をしていることなど気づきようもない。わたしが「誤解だ」と思うのは、わたしの発言に対して、他者が何か応答をした、そのときである。

では逆に、他者が、自分の解釈が「誤解」、つまりは送り手の意図とは異なる解釈だったと気づくのはどのような瞬間だろうか。わたしが「誤解だ」と思ったときだろうか。しかしこれも同様に、他者にはわたしの心の中は見通せないで、わたしが「誤解だ」と思ったことは、この時点ではまだ他者には気づかれない。他者が、自分の解釈が「誤り」であったと気づくのは、他者の解釈が誤解だということをわたしが他者に対して表明した、その瞬間になるだろう。

つまり、理解あるいは誤解とは、コミュニケーションにおいてのみ確定されていくのであり、コミュニケーションにおいてしか確定されえない。言い換えれば、送り手が発した言葉を受け手が解釈したその瞬間にはまだ、送り手にも受け手にも、受け手の解釈が「正しい」解釈（＝理解）だったのか、あるいは「誤った」解釈（＝誤解）だったのかを判断することはできない。受け手の解釈が理解だったのか誤解だったのかが判断できるのは、続くコミュニケーションを観察するばあいにおいてのみである。

例を挙げよう。たとえば、友人同士のAとBの会話において、Aが「もうそろそろ帰りたいなあ」と思って、「そろそろ暗くなってきたね」と言ったとする。しかしBがAの意図をはかりかねて「そうだね、最近、日が短くなってきたね」などと答えたばあいには、Aの意図とはかかわりなく、Aの発言は季節に関する話題提供の一種であったことが理解される。というのも、そうした会話（「そろそろ暗くなってきたね」→「そうだね、最近、日が短くなってきたね」）を観察する者にとっては、Aの心のなかは見通せないからである。

しかしながら、そうはいつでも、次のコミュニケーションにおいて、Aが「そろそろ帰ろうか」と切り出したさいには、再びさかのぼって、Aの最初の発言である「そろそろ暗くなってきたね」もまた、「帰ろう」という提案を引き出すための発言であったことが（つまりは、さきほどのBの理解が「誤解」であったことが）理解されることになる。

(4) 理解の重要性

さて、再び話は、情報・伝達・理解といったコミュニケーションを構成する3つの要素の話に戻る。これら3つの要素は、どれが欠けてもコミュニケーションにはなりえず、常

に 3 つがいっしょになってコミュニケーションを生み出している——「情報と伝達と理解の関係は、相互に前提し合う循環的な関係なのである」(同上:118)。

それゆえ、たとえば、情報だけがあったとしても、それが伝達されなければ、コミュニケーションにはなりえない。伝達されない情報は、たんなる知覚された情報である。しかし情報が伝達されたとしても、それが理解されなければ、やはりコミュニケーションにはなりえない。それはせいぜい大きな独り言、あるいはただのノイズである。つまり、送り手が何かを伝達したとしても、そこに受け手が何の意味も見出せないばあいには、それはコミュニケーションではなく、たんなる知覚された音(あるいは行為)に過ぎないのである。

したがって、コミュニケーションを構成する 3 つの要素はいずれもコミュニケーションにとって不可欠ではあるのだが、3 つのうちでもとくに、理解の重要性が傑出していることが見て取れる——「コミュニケーションが生起するのは、何をさしおいてもまず、伝達と情報の差異が理解されるばあいである」(同上:113)。コミュニケーションは、理解されることではじめてコミュニケーションとして成り立ちえるのであり、逆に言えば、理解されることなしにはコミュニケーションは成り立ちえないのである。

(5) コミュニケーションのはじまりと、コミュニケーションの境界

このことから、相互作用場面におけるコミュニケーションのはじまりと、そのコミュニケーションの境界ということについて考えることができる。

前述したとおり、コミュニケーションは、理解されなければコミュニケーションとして成り立ちえない。したがって、特定の場面において、ある人がある人を知覚したというだけでは、コミュニケーションは生起しえない。2 人のあいだにコミュニケーションが生起するのは、少なくとも一方が他方を知覚した上で、なんらかの行為を行い、もう一方の側によって、その行為に情報を伝達するなんらかの意味があることが見いだされた(=理解がなされた)、その瞬間である。つまり、誰しも経験があるように、わたしが友人を見かけて手を振ったり声をかけたりしたとしても、友人がそれに気づかないならば、コミュニケーションははじまらない。コミュニケーションがはじまるのは、友人がわたしの行為に気づき、何らかの応答を示したそのときである。

ただし、ある人がある人の行為に意味を見いだすことがコミュニケーションのはじまりであるという言い方には、少し語弊がある。というのも、そうした言い方では、コミュニケーションを成り立たせているもっとも重要な条件(=コミュニケーションの構造)が見逃されてしまうからである。

たとえばレストランにおいて、わたしがわたしの隣のテーブルにいる人たちが会話しているのをぼんやりと眺めているとき、わたしは、そのテーブルに着いている人たちが何らかの情報の伝達をおこなっていることを見て取っている。ばあいによっては、その会話の意味さえ把握しているかもしれない。しかし、そこでわたしが、その隣のテーブルの人たちとコミュニケーションを開始する可能性はほとんどない。なぜなら、隣のテーブルでおこなわれている会話は、わたしに向けられた会話ではないからだ。

したがって、コミュニケーションの生起にとって理解と並んで重要なのは、そのコミュニケーションに関与する人びとが互いに、自らの発言に相手が応答してくれるだろうとい

う期待をもっていること、ならびに、相手の発言に応答することが自らに期待されるだろうという期待をもっていること、つまりはコミュニケーションに関与する人びとが相互にもつ期待である。そしてこうした期待可能性こそが、相互作用におけるコミュニケーションの境界を、つまりは、誰がその相互作用コミュニケーションに参加し、誰がその相互作用コミュニケーションに参加していないのかを確定しているのである。

3. 「コミュニケーションだけがコミュニケーションできる」ということ

さて、ここまでにおいて、というよりもむしろ、前節(3)の段階において実はすでに、「コミュニケーションだけがコミュニケーションできる」ということがどうということかについて考えるためのヒントは出揃っている。そこで本節ではまず、そのことについて考えよう。

(1) 「コミュニケーションだけがコミュニケーションできる」ということの意義

前節(3)において、送り手と受け手は互いに互いの心の中を覗くことができないので、互いの解釈が正しい解釈(=理解)だったのか、誤った解釈(=誤解)だったのかは、コミュニケーションをとおしてしか判断できないと言ったことを覚えているだろうか。

A がたとえ、「違うんだけどなあ」と思ったとしても、当然ながら、思っただけではどうにもならない。必ずしも言語に頼る必要はないが、なんとか B に「理解」される方法で、「違う」と思ったことを伝えなくてはならない。繰り返しになるが、理解あるいは誤解は、コミュニケーションにおいてのみ確定されていくのである。

「コミュニケーションだけがコミュニケーションできる」とはどのようなことなのかを考える上では、このことが決定的に重要である。

つまり、コミュニケーションだけが、すでにおこなわれたコミュニケーションの意味を確定できるし、コミュニケーションだけが、すでにおこなわれたコミュニケーションを修正することができるのである。逆に言えば、コミュニケーションされていない事柄は、コミュニケーションに何ら影響を与えることができないということになる——「コミュニケーションされない事柄は、コミュニケーションには何ら寄与することはできない。コミュニケーションだけが、コミュニケーションに影響を与えることができるのである。言い換えれば、コミュニケーションだけがコミュニケーションという統一体を分解することができるのであり(たとえば、情報の選択地平を分析してみたり、あるいは伝達の基盤について問うてみたりすることができるのであり)、コミュニケーションだけがコミュニケーションを点検したり、修繕したりすることができるのである」(Luhmann 1995:118)。

そしてまた、以上のことは同時に、その場で起きた出来事や人間の意識というものがコミュニケーションに対して直接的には影響を与えることができないということを表している。

例を挙げてみよう。再び、友人同士である A と B が会話をしている場面を想定しよう。たとえば、2人の会話の最中に A のお腹が鳴ったとする。そのとき A は、自らのお腹の鳴ったことを知覚し、その瞬間に「さっきからずっとお腹が空いていたんだよなあ」とか「そういえば今日は昼ご飯が早かったしなあ」とか「今日の晩ご飯は何にしよう」とか、さま

ざまなことを考えるだろう。そして同時に B も、A のお腹の音を知覚していれば、「A はお腹が空いているらしい」とか「そういえば自分も小腹が減っているなあ」とか「A を食事にも誘おうか」など、さまざまなことを一瞬のうちに考えるだろう。

だがこの時点ではまだ、A のお腹の音が鳴ったという出来事は、コミュニケーションに対して何の影響をも与えてはない。なぜなら、A と B には、A のお腹の音を無視して、何事もなかったかのように、それ以前におこなっていた会話を継続させるという選択肢もあるからである。

しかし B が (A のお腹の音を無視することなく) A に対し、「お腹が空いているみたいだね。何か食べに行こうか」と言ったとする。すると、この時点ではじめて、A がお腹を鳴らしたという出来事が、そして B の考えていたことの一部がコミュニケーションに影響を与えることになるのである。

このように、ある出来事や意識は、たとえ知覚されていたとしても、コミュニケーションされない限りはコミュニケーションに影響を与えることができない。ある出来事やある思考がコミュニケーションのきっかけを生むことは確かであるが (そしてそのことがコミュニケーションにとっては必要不可欠なものであることもまた確かであるが)、コミュニケーションされない出来事は、たんに何らかの出来事が起こっただけなのであり、コミュニケーションされない思考は、たんに何らかの思考がはたらいただけなのである。

繰り返しになるが、コミュニケーションだけが、コミュニケーションに影響を与えることができるし、コミュニケーション以外の何ものもコミュニケーションに影響を与えることはできない。

「人間がコミュニケーションをするのではない。コミュニケーションだけがコミュニケーションできる」というルーマンの言葉は、それだけを聞くと、まったく意味がはかりがたく、何かの言葉遊びのようにも思えるが、その真意は、こうしたコミュニケーションの創発性と自律性を端的に表現することにあつたのだと言える。

(2) 「人間がコミュニケーションするのではない」ということの意義

ここまでの議論をとおして、「コミュニケーションだけがコミュニケーションできる」ということについては十分に了解されたのではないかと思う。だが、「コミュニケーションするのは人間ではない」という点についてはどうだろう。多くの人はこの言葉に、まだ違和感があるのではないだろうか。

通常、わたしたちは、わたしたち人間がコミュニケーションすると考えている。では、わたしたち人間がコミュニケーションするとはどういうことだろう。もう少し掘り下げて考えてみよう。

わたしたちが「わたしたち人間がコミュニケーションする」と考えるとき、わたしたちの多くが思い浮かべているのは、第一義的には、わたしたち人間が話すということ、そして聞くということである。しかし、おそらくそれだけではないはずだ。わたしたちが「わたしたち人間自身がコミュニケーションする」と考えるとき、わたしたちはおそらく、だからわたしはわたし自身が考えていることをきちんと言葉にすることができるはずだと考え、他者の考えていることをきちんと理解することができるはずだと考えているのではないだろうか。つまり、わたしたちが「わたしたち人間がコミュニケーションする」という

とき、わたしたちが思い描いているのは、わたしたち人間はコミュニケーションを支配し、コントロールすることのできる存在であるということなのである。

しかし、それは本当だろうか。

現実的には、わたしたちはコミュニケーションのなかで、多くの期待はずれに遭遇しているはずだ。たとえば、わたしたちは、自分の考えていることが言葉でうまく表現できなかったり、始めはうまく話せていたのにそのうち「これは自分の言いたかったこととは違う」と感じたり、話しているうちに自分が何を言いたかったのかわからなくなってしまったりすることがある。あるいは、自分はずまく話せたにもかかわらず誤解されてしまったり、あしらわれてしまったり、無視されてしまったり、そんなつもりはなかったのになぜか喧嘩になってしまったりすることもある。あるいは、きちんと聞いていたはずなのに、相手が何を言いたいのかさっぱりわからなかったり、誤解や勘違いをしていたりすることもある。

コミュニケーションがわたしたち人間の意のままになることなどほとんどない。

だからルーマンはこう考える。つまり、確かに人間がいなければ、コミュニケーションは生まれえない。より詳しく言えば、確かに、何かを考えたり、考えたことを言葉にしたり、言葉を聴いたり、言葉に意味を見出したりする人間がいなければ、コミュニケーションは生まれようもない。しかし、だからといって、「人間がコミュニケーションをしている」、つまり人間がコミュニケーションを支配し、コントロールできると考えるのは現実的ではない。なぜなら、一度生まれたコミュニケーションは、その時点ですでに、それを生み出した人間の手を離れ、人間の意のままにはならないものとなってしまっているからだ。社会学の通常の言い方にならえば、コミュニケーションは、コミュニケーションとして生み出されたその瞬間から、人間には還元できない、そして人間にはコントロールできない、創発性を有することになるのである。

したがってルーマンは、人間とコミュニケーションを切り離して考えることを提案する。つまり、確かにコミュニケーションは人間なくしては生まれえないのだが、一度生まれたコミュニケーションは、そのコミュニケーション独自のしかたでコミュニケーションを展開させていると考えるのだ。そうすれば、コミュニケーションが人間の意のままにはならないことは不思議でもなんでもなくなる。むしろ、コミュニケーションが人間の意のままにならないのは当然のことなのだと思えることができる。

このことから、ルーマンの「コミュニケーションするのは人間ではない」という言葉は、人間やコミュニケーションを観察するための分析視角のひとつだということが明らかになる。つまり、通常わたしたちは、人間がコミュニケーションしていると考えている。それはそれでいい。だがそうした考え方は、人間がコミュニケーションをコントロールしているとか、コミュニケーションが人間の意のままになるという錯覚をもちやすく、現実を正確に捉えることを難しくする。だから（じっさいにコミュニケーションをしているのは人間かもしれないがそれはそれとして）とりあえず、人間とコミュニケーションを切り離し、人間がコミュニケーションをするのではなくコミュニケーションだけがコミュニケーションをするのだと考えてみようと思案するのである。そして、おそらく、そのほうが現実を、言い換えれば、人間とコミュニケーションの現実的な関係を、より精確に描写できると主張しているのである。

(3) 意識の自律性と、意識とコミュニケーションの關係のしかた

ここまで、コミュニケーションの自律性に重点をおいて話をしてきた。本節の最後は、そうしたコミュニケーションの自律性に対する意識の自律性と、意識とコミュニケーションの關係のしかたについて述べようと思う。

意識の自律性はおそらく、コミュニケーションの自律性よりも、わたしたちにとっては実感しやすいだろう。というのも、自分の意識がコミュニケーションによってコントロールされているとか、コミュニケーションに還元されるなどと思う人は、おそらくほとんどいないだろうからだ。

人間の意識は、コミュニケーションに多少なりとも影響されることがあるとはいえ、コミュニケーションによって拘束されることはなく、原則的に自由である。わたしたちはコミュニケーションに参加しながらも、コミュニケーションされている事柄以上にたくさんの事柄を考えることができるし、コミュニケーションされている事柄とは全く關係のない事柄を考えることもできる。あるいは、わたしたちの意識は、わたしたちがいかなるコミュニケーションにも参加していないときでさえも、確固として存在している。つまり、わたしたちの意識は、コミュニケーションとはまったく独立して存在し、コミュニケーションから離れても独自で働くことのできる、自律性をもっている。

では、このようにして人間の意識とコミュニケーションの双方が自律性をもっているとすると、そうした両者は、どのようにして關係しあっていると考えることができるだろうか。

例を挙げて考えよう。

わたしたちはたまに、「ある人の一言が自分の人生をかえた」というような言葉を見聞きすることがある。そういうばあい、わたしたちはたぶん、コミュニケーションにおける送り手の言葉が受け手の意識をかえたのだと捉えるだろう。言い換えれば、コミュニケーションが意識をかえたのだと捉えるだろう。

だが、そこで少し考えてみよう。これまで何度も繰り返してきたとおり、あるコミュニケーションにおいて、受け手の解釈が本当に正しい解釈だったのか、誤った解釈だったのかは、続くコミュニケーションによって点検され、確かめられるまで、判断できない。しかし当然ながら、わたしたちのおこなう会話の多くでは、いちいち、「わたしはあなたのこれこれこういう言葉を、このような意味だと解釈したのだけど、それは正しい？」と確認することはない。双方がなんとなくわかったようなつもりになって、あるいは、わかってもらったようなつもりになって、コミュニケーションが進んでいく。つまり、わたしたちがおこなう多くのコミュニケーションでは、受け手は、わざわざ相手の意図を確かめない限り、受け手なりの解釈をすることしかできないのである。

だから、送り手の言葉が受け手に対して何らかの影響を与えたのだというならば、それは、送り手の言葉が、受け手の意識をかえるきっかけになったというくらいのことである。受け手は、送り手の言葉を受け手なりのしかたで解釈し（それは誤解かもしれない）、受け手なりのしかたで処理し（この時点で、「自分にとっては価値のない言葉だ」と切り捨てることもできる）、受け手なりのしかたで自らをかえたのだと言える。イヤな言い方をすれば、送り手の言葉のすばらしさが（あるいは、送り手の意図や、思想や、送ってきた人生のすばらしさが）受け手の意識をかえたのではなく、受け手が送り手の言葉を勝手にわかった

つもりになって、勝手に感銘を受けて、勝手にかわっただけだとも言える。

したがって、ここから、送り手の言葉、ひいてはコミュニケーションというものは、意識にとってはたんなる「刺激」としかなりえないことが明らかになる。つまり、これまで本稿では、意識はコミュニケーションに対して直接的に影響を与えることはできないと繰り返し述べてきたが、その意味するところは、意識とコミュニケーションとの関係において互いが互いに与えられるのは刺激のみであり、そうした刺激をどのように役立てるのか（あるいは役立てないのか）は、その意識あるいはそのコミュニケーションに任せられているということである。

4. おわりに

まとめよう。冒頭で示した「コミュニケーションするのは人間ではない。コミュニケーションだけがコミュニケーションできる」という言葉は、それだけを聞くと全く意味がわからないが、その真意は、コミュニケーションの創発性および自律性、そして人間の意識の自律性を保障することにあつた。

ルーマンがこのような奇妙な表現を選んだ理由は、おそらく、「コミュニケーション」や「理解」という言葉に対して通常もたれているイメージを打破することにあつたのだと思われる。そのイメージとは、ひとつには、本稿でも何度か取り上げたように、「コミュニケーション」や「理解」とは、情報の移転、つまりは送り手の伝えたいと思つたことがらが受け手にそのまま伝わる（＝移転される）ことであるというもの。もうひとつは、「コミュニケーション」や「理解」は「人びとのコンセンサスを得るため」とか「人びとがわかりあうため」にあるというものである。

ルーマンは自らの著作のなかでたびたび、社会学の諸理論においてさえも、こうした「コミュニケーション」イメージや、「理解」イメージが支持されていることに対し、苛立ちを示している。なぜなら、そうした通常の「コミュニケーション」イメージや「理解」イメージは、現実に照らし合わせれば照らし合わせるほど、現実に即してはいないことが明らかになるからである。

ルーマンは言う——「社会学は、その科学についての考え方に依拠して、社会的リアリティというものがあるかのように、社会的リアリティとかかわっている。そうであるからには、社会学が問うべき通常の間いは、こうした社会的リアリティに即して展開されなければならないし、その社会の外部からもちこまれたような社会学の理想表象として提示されてはならないのである」(Luhmann 1997:36)。

この引用箇所は、とりわけ、社会学の諸理論におけるコミュニケーションの捉え方に対する批判として書かれたものではないが、ルーマンの社会学的方法論の根幹であるため、コミュニケーションの観察についても同じことが言えるだろう。つまり、「コミュニケーション」や「理解」について通常もたれているイメージは、社会的リアリティでもなんでもなく、「こうであつたら良い」と社会学者たちが考えている、たんなる「理想の表象」なのである。だが社会学者は、社会学という科学を実践する限りにおいて、そのような「理想の表象」を提示するのではなく、社会的リアリティを誠実に描写しなければいけない。

だからこそルーマンは、そうした他の諸社会学理論における「コミュニケーション」の

「常識」的な考え方を打ち破るために、わざと、一見すると奇妙な、しかしインパクトのある言葉——「コミュニケーションするのは人間ではない。コミュニケーションだけがコミュニケーションできる」——を用いたのではなかろうか。

本稿では、ルーマンのシステム理論が、わたしたちが生きる現実を的確に描写しうる理論のひとつだということを伝えるために、なるべく多くの具体的な例を提示できるよう努めてきた。そうした具体例を提示していくことで、難解だと言われているルーマンの言葉のひとつひとつは、実はそれほど難しいことを言っているわけではなく、わたしたちがふだん何気なくおこなっていることを、より現実に適合したかたちで言い表したものだということが理解されるきっかけになればよいと思う。

はじめに述べたように、ルーマン理論はおもしろい。今回紹介したもの以外にも、ルーマン理論のなかには、現実を的確に捉えるための理論的資源がまだ数多く埋もれている。そうした理論的資源を、ルーマン理論は難しいという偏見だけで捨て置き、埋もれたままにしておくのは非常に惜しい。そうした行為は社会学という科学にとっても不利益にしかならないだろう。とくに、社会学ではここ最近、経験的な研究の重要性がますます高まる傾向にある。そうした状況であるならいっそう、わたしたちがふだん何気なくおこなっているさまざまなことを精細に描写し、「社会的リアリティ」をよりの確に把握しうる、ルーマン理論のような社会学理論が見直されてよいのではないだろうか。

<文献>

- Luhmann, Niklas, 1984, *Soziale Systeme. Grundriss einer allgemeinen Theorie*, Suhrkamp. (= 佐藤勉監訳, 上: 1993, 下: 1995, 『社会システム理論』恒星社厚生閣)
- Luhmann, Niklas, 1995, Was ist Kommunikation?, in: *Soziologische Aufklärung Bd. 6. Soziokogie und der Mensch*, Westdeutscher, 113-124.
- Luhmann, Niklas, 1997, *Die Gesellschaft der Gesellschaft*, Suhrkamp.